

歯科健康診査に関しては、健診を担う会員はもとより、健診時に行う保護者への情報提供の機会・時間は十分とはいえなかった。そのため保護者からの質問に対して、限られた情報の中で短時間に回答することは難しく、保健所を通しての問い合わせなどが報告されていた。

そこで郡山歯科医師会と連携し、母子歯科保健事業の充実と歯科健康診査の精度向上、保護者への説明内容の統一化を目的に、『乳幼児歯科健診マニュアル』を作成した。

健診の際の注意事項や判断基準の確認、今までの健診では重要視されていなかったインシデントに対する対応策や、健診時に保護者から受ける相談に対する具体的な回答例を提示したマニュアルは、有用であるとの回答が得られた。地域歯科保健事業における乳幼児歯科健診の意義は大きく、適正な診査をもとに、市民に対する正しい情報提供が必要と考えられた。

本学歯学部附属病院小児歯科に紹介された患者数は年々増加傾向にあり、これまで地域歯科医師会と連携を強化してきたことも要因と考えられた。

(結 語) 今後も地域のニーズに合わせて必要な情報を発信するとともに、関係機関との連携を密にして診療面においても地域歯科医療に貢献していきたいと考えている。

9) 平成18年度に実施したPBLチュートリアルの概要と評価

○清野 晃孝, 釜田 朗, 田代 俊男, 影山 勝保
鎌田 政善¹, 齋藤 高弘

(奥羽大・歯・診療科学, 歯科補綴)

(目 的) 自ら問題点を的確に抽出し、周囲と協調しながら変化に適切に対処できる人材の育成に教育の重点がおかれるようになった現在、PBLチュートリアルが歯学教育に急速に取り入れられている。そこで当講座では、平成17年度から臨床実習においてPBLチュートリアルを試み、今回は平成18年度の概要とアンケート結果を報告した。

(方 法) 平成18年度に実施したPBLの概要として、対象は5学年の91名であり、時間帯は月曜日から金曜日の午前10時から正午までの2時間

とした。1グループは6人から8人とし、各グループは週に1回、3週連続で、合計3回実施した。3回目には症例発表会を行い、アンケートを記載後、チュートリアルノートを提出させた。1グループに対してチューターは固定しなかった。

アンケートの内容は、実習方法、内容の質、内容の量、シナリオ、グループ学習の時間、グループ討議の時間、自習に費やした時間、グループ討議への参加程度、チューターの介入度、学習効果の10項目についてであり、それぞれ5段階の評価として記入してもらった。

(結果と考察) 平成18年度の第5学年を対象としたPBLチュートリアルは、学習効果について学生からよい評価を得た。シナリオは興味深く受け止められたが、自学自習の目的意識を高めることについては不十分であった。グループ討議の時間が1回2時間、3週連続のプログラムは、時間が長いとの意見も多く、学生の積極性に欠ける部分も伺えた。平成19年度は教務日程に組み込まれたPBLチュートリアル教育の構築がすでに図られており、特に臨床系講座の教員の取り組みと対応が直接、教育効果に影響するものとする。

10) 歯学部1年生におけるミラーテクニック体験学習の有用性

—平成17年度および平成18年度の比較—

○田辺 理彦, 東田 大輔, 秋葉 祐輔, 笹原 麻美
中島 大誠, 森下 浩江, 佐藤 穩子, 今井 啓全
佐々木重夫, 天野 義和

(奥羽大・歯・歯科保存)

(緒 言) 我々は奥羽大学歯学部1年生の附属病院体験学習の中で将来歯科医師になるための自覚と認識を高めさせる目的で日常生活において慣れ親しんでいる鏡に関連したミラーテクニックの体験学習を行ってきた。今回は平成17年度および平成18年度の比較した。

(方 法) 本学歯学部1年生(平成17年度:91名,平成18年度:89名)を対象に総合歯科第1診療室医局および診療室において行った。学習内容は①体験学習前質問紙調査(プレアンケート:3項目)。②鏡の特性と歯科診療におけるミラーテクニックの意義に関する講義(術者の診療姿勢や

患者の体位など)。③ 2人が1組となり、相手の差し出した鏡を見ながら自己の名前書き（ひらがな、漢字、ローマ字など）、図形の線引き、迷路たどり（単純、複雑なもの）。④ 各自での迷路たどり（複雑なもの）。⑤ 診療室内でデンタルミラーを用いて顎模型の歯を探針で触れる練習（マネキン使用）。⑥ 体験学習後質問紙調査（ポストアンケート：8項目）とした。

（結果）プレアンケートの結果では年度間に関係なく「日常生活において鏡を毎日みる」、「歯科健診や歯科治療に鏡を使用すると思う」、「歯科健診や歯科医院で鏡の使用を見た」との回答率が高かった。ポストアンケートの結果では「本体験学習は楽しかった」が、鏡を使用しての名前書き、図形の線引きおよび迷路たどりは「逆に写るところが難しく」、体験してみて「眼や首が疲れた」との回答率が高かった。また、平成17年度、平成18年度ともに「歯科診療においてミラーテクニックは必要だと思う」とすべての者が回答しており、さらに「本格的なミラーテクニックを習得したいと思う」および「本体験学習を受けて歯科医師になる目的意識があがった」との回答率が高かった。

（結論）質問紙調査の結果から本学歯学部1年生においてデンタルミラーは歯科健診や歯科治療に使用されているなど、その認知度は高いことがうかがえた。また、平成17年度、18年度ともに日常に使用されている鏡に関連したミラーテクニックの体験学習は鏡の日常の使われ方と異なるので「難しかった」、「疲れた」などの回答が多く認められたが、「楽しかった」と回答した者も多く認められた。さらに、臨床におけるミラーテクニックの重要性を認識することができ、将来、歯科医師になる目的意識が「あがった」と回答した者も多く、本体験学習の有用性は高いものであったと思われた。

11) Ohio State UniversityおよびOhio Children's Hospitalの歯科麻酔臨床

○山崎 信也

（奥羽大・歯・口腔外科）

（緒言）学会や留学などを通して、世界的または全国的に進んでいる点を捕らえ、良いところ

は積極的に本学に取り入れていく必要があると思われまふ。今回、ニューオーリンズでのIADR参加に先だつて、Ohio State University(OSU)で講演をする機会を頂き、同時に3日間にわたつてOhio State UniversityおよびOhio Children's Hospitalでの歯科麻酔臨床を視察する機会を得ましたので、その概要を報告致します。

（概要）OSUはOhio州Columbusにあり、日本で言うと仙台に気候、人口、治安などが非常に近い。OSUは多くの学部と多くの学生を抱え、広い敷地の中心にはフットボールスタジアムを持つ。歯学部の学生数や病院規模は当大学とほぼ同じであるが、患者数は非常に多い。歯学部における日帰り全身麻酔症例は日本の平均的な医学部附属病院よりも多く、関連病院であるOhio Children's Hospitalを合わせると、約2倍となる。いずれも外来部門よりも、日帰り全身麻酔部門の方が多くを占めている。

（結語）世界を見てくると、国際学会に参加すること、学問の交流を大切にすることに大きな意味があると痛感しました。麻酔が安全になると、苦しんで歯科治療を受ける時代ではなくなり、各診療科と歯科麻酔科のつながりが更に強くなると思われまふ。入院下では種々の医療事故が付きまといまふ。極力、不要な入院を減らした外来管理が、医療安全の面でも発展していくと思われまふ。麻酔管理症例を増やす事が、病院が利益を上げ生き残っていく手段にもなると思われまふ。

12) ソケットプリザベーション後の治癒経過に関する臨床的検討

○塚本 光、宮下 照展、馬庭 暁人、渋谷 洋子
中江 次郎、金 秀樹、大野 敬

（奥羽大・歯・口腔外科）

歯の喪失や歯槽部皮質骨の吸収によって生じた陥凹部分を長期間放置すると高さや幅径が減少し、歯槽堤の温存が困難となることがある。

今回、当科でインプラント治療前提の患者を対象にソケットプリザベーションを施行した12例15部位の中で経過を追えた2例と対照症例2例について輝度および回復率を用いて抜歯後の治癒経過について検討したので報告した。